

研究ノート

カプチン会士アンブロシオ・デ・バレンシーナによる米西戦争以前のミクロネシアにおけるスペイン・カプチン会の宣教に関する所見について

渡 邊 千 秋*

はじめに

ミクロネシアのカロリン諸島¹⁾は、かつて帝国日本海軍が「海の生命線」とうたった南洋群島の一部を構成する島々であった。この地は日本の委任統治領となったのちには、スペインのイエズス会が積極的な宣教活動を展開した地域である²⁾。では、イエズス会進出以前の宣教は、どのように行われていたのだろうか。

国王カルロス 2 世（在位 1665-1700 年）にちなんで命名されたカロリン諸島は、長い間、スペイン帝国にとっての辺境であり「見捨てられた」地域であった。そして 19 世紀後半になると、ビスマルク宰相のもとで膨張するドイツ帝国がその領有権を主張し、ドイツ・スペイン間での外交問題に発展した。1885 年に生じた対立紛争に由来する危機を回避させようとして、二国間を仲介したのは、当時のローマ教皇、レオ 13 世（在 1878-1903 年）であった。その結果、スペインの領有が確認され、この地域の宣教を担当することになった

* 青山学院大学国際政治経済学部教授

- 1) 本稿で用いるカロリン諸島の地名は、カプチン会士バレンシーナが用いた 19 世紀末当時の名称を使用する。また本稿で使用する全 URL の最終確認日は 2025 年 7 月 23 日である。
- 2) 日本の委任統治領としての南洋群島におけるイエズス会の宣教活動については、たとえば以下を参照されたい。渡邊千秋「宣教のためのトランスナショナルな挑戦：スペイン系イエズス会士アントニオ・グアスク・イ・ブフィを例に」『青山国際政経論集』114 号、2025 年、197-211 頁。

のがスペイン・カプチン会であった。

本稿では、レオ 13 世の仲介後、カロリン諸島に向ったカプチン会士の記した書籍をもとに、当時の宣教師が宣教地とそこに住む人々に対してどのようなまなざしを持ったのかについて、考察したいと思う³⁾。

本稿で扱う書籍とその著者について

『我がオセアニアへの旅：あるカプチン会宣教師による、カロリン諸島における我が宣教地創設史。好奇心をそそる関連事項』は、スペイン人カプチン会士アンブロシオ・デ・バレンシーナによって記された。この書は、太平洋地域島嶼部の政治状況を一変させることとなる米西戦争直前の時期において、南太平洋カロリン諸島でスペイン・カプチン会がどのように宣教活動を展開したのかを記録した書籍である⁴⁾。本稿では、スペイン・バレンシア地方のオリウエラで 1892 年に出された初版を基礎に、また、アンダルシア地方セビーリャで 1902 年に出版された第 4 版⁵⁾ も参照しつつ、考察を進めたい。

フランシスコ・マリン・モルガド、つまり後に修道士として霊名アンブロシオ・デ・バレンシーナを名乗るようになる人物は、1859 年 11 月にスペイン

3) 近年、19 世紀末のカロリン諸島・パラオ諸島における宣教に関する研究が少しずつ進展しつつある。この点に関しては、以下を参照されよ。Xavier BARÓ Y QUELART: «El ocaso de un imperio: la presencia de capuchinos españoles en Carolinas y Palaos (1886-1899)», en Rafael RODRÍGUEZ-PONGA y Miguel Ángel BARBERO (eds.): *Quinientos años en un océano llamado Pacífico*, Madrid, Dykinson, 2023, pp.201-211.

4) Ambrosio de VALENCINA: *Mi viaje a Oceanía: Historia de la fundación de las misiones capuchinas en las islas Carolinas. Relación curiosa*, Orihuela, Tip. de la Lectura Popular, 1892. 以下、本書を *Mi viaje*…、また本書書名の日本語訳を『我がオセアニアへの旅…』と略記する。本稿では時代性を考慮しバレンシーナの表現を変更せずに用いる。なお、スペイン語第一版は、スペイン国立図書館の以下の URL で閲覧できる。
<https://bdh-rd.bne.es/viewer.vm?id=0000081157&page=1>

5) 第 4 版の書名は『我がオセアニアへの旅；カロリン・パラオ諸島におけるカプチン会宣教地創設史』であり、初版のタイトルに若干の変更が加えられている。また、本稿では用いないが、スペイン国立図書館の蔵書目録では 1917 年に第 5 版が出版されたことが確認できる。なお、第 4 版の書誌情報は以下の通り。Ambrosio de VALENCINA: *Mi viaje a Oceanía: Historia de la fundación de las misiones capuchinas en las islas Carolinas y Palaos*, (4ed.) Sevilla, Imp. de la Divina Pastora, 1902.

南部アンダルシア地方のバレンシーナ・デ・ラ・コンセプションで生まれた⁶⁾。のち、カプチン会に入会、アンブロシオ・デ・バレンシーナという名が与えられた。本稿でとりあげる『我がオセアニアへの旅…』は、1886年から1887年にかけて、バレンシーナが他のカプチン会士と共にマニラ経由でカロリン諸島方面に宣教の旅へ出た折に見聞きした事象を、彼自身の体験と記憶に基き記すとともに、伝聞情報を用いて、当該地域におけるカプチン会の宣教活動を整理し直したものである。カロリン諸島へ渡った当時はまだ聖職者としての人格形成中であった若きバレンシーナは、管区長ホアキン・デ・リエバネーラスの書記として、旅に臨んだのであった。帰国後、1888年にはマドリードにおける上長に任命され、のちにバレンシア地方のオジェリア修道院長代理 (vicario)、トレード管区等の管区長などを歴任した。カプチン会会憲の見直しにかかわる国際委員会のメンバーをつとめる一方、スペイン国王アルフォンソ 13 世（在位 1886-1931 年）との関係も深かった。カトリック的基準に基づく「良書」を出版するための事業に携り、1900 年には雑誌『聖フランシスコの闘士 (*El Adalid Seráfico*)』を創刊したほか、自身でも論文・著書を多数執筆した⁷⁾。また、カロリン諸島ボナペ島の言語に関する書籍を執筆していることもここに改めて記しておきたい⁸⁾。バレンシーナは、1914 年、55 歳で帰天した⁹⁾。

書籍の概要及びバレンシーナがこの書籍を執筆した理由について

『我がオセアニアへの旅…』は全 21 章で構成される。全体で 71 ページを数

6) Rufino BLANCO Y SÁNCHEZ: *Elementos de la literatura española e hispanoamericana*, Madrid, Tip. de la Revista de Archivos, Bibliotecas y Museos, 1925, p.367.

7) 他に言及がない限り、この段落で記したバレンシーナの人物像は、カプチン会セビーリャ修道院が運営するホームページ上の情報に基く。<https://capuchinossevilla.org/frailles/fray-ambrosio-de-valencina-francisco-de-asis-marin-morgado/>

8) Ambrosio de VALENCINA: *Diccionario hispano-kanaka o sea modesta colección de las voces más usadas y conocidas de esta lengua de la Ascensión o Ponapé*, Tambobong, Imprenta de Asilo de Huérfanos de Nuestra Señora, 1892.

9) <https://www.capuchinoseditorial.org/autor/4654/ambrosio-de-valencina> この情報はカプチン会の出版部ホームページによる。また、ホームページ上では見られないが、本書の見聞きページには「元アンダルシア管区の管区長」との記述がある。

えるが、第1章から第8章までは主にバレンシーナを含む宣教師の第二次グループがスペインを出帆してから中継地マニラへ到着するまでの記録であり、第9章以降で、宣教地カロリン諸島での体験などが綴られる。挿絵などはなく、視覚的に読者をひきつける書籍ではない。また記述法をみると、著者バレンシーナは、一人称複数形「われわれは」もしくは三人称複数形「彼らは」を主語とする形で多くの文章を表現しており、一人称単数形「私は」が主語として用いられることは少ない。バレンシーナは執筆の意図について、

私は、カロリン諸島における私たちの宣教地の創設の歴史と、彼の地で現在私たちの宣教師があの気の毒な靈魂のために行っていることについて、忠実に叙述しようと思う。

と述べている。このような彼の言には、先住の人々へのカトリック宣教の必要性について疑念のはいる余地のない、バレンシーナの思考の一端が読み取れる。具体的には、バレンシーナより一足早く出発した先遣隊のカロリン諸島ヤップ島での経験と、その先遣隊の後を追うバレンシーナを含む第二次グループのポナペ島での経験とが記されることとなる。また、登場人物それぞれの思考や行動が交差する様子に関する記述もみられ、バレンシーナ自身の個人的経験談を記すというよりは、当時、カロリン諸島へ渡ったスペイン・カプチン会の宣教活動を全体的に記し、読者の記憶に留めさせたい意図が見え隠れする。それでは、以下、書籍の内容詳細をみてみよう。

なぜカプチン会がカロリン諸島へ向かったのか

バレンシーナはカロリン諸島にカプチン会が宣教地を創設することになった理由について解説し、ドイツ帝国のこの地域における行動について言及している。植民地拡大の野望を抱くドイツは、スペインが長くカロリン諸島を放置していたことを理由に、同地をスペインから奪おうとしたため、スペインがこれに抗議の声をあげたのだ、と主張し、スペイン政府の対応を正当化するのであ

る¹⁰⁾。

当時、ヨーロッパ諸国による帝国主義政策の拡大の機に乗じて、ドイツ帝国はビスマルクのもとでの覇権拡大に挑んでいた。資金も兵士も、彼らをかの地まで動かす艦船も不足しており、また国王アルフォンソ 12 世（在位 1874-1885 年）が病床にあるなかで、スペインはドイツと対峙することとなる。1885 年 8 月 11 日、ドイツが公式にカロリン諸島を保護領化する意図をスペイン政府に伝達したことで、カロリン諸島領有をめぐる危機的状況が顕在化した。当時のカロリン諸島は、スペイン領フィリピンにとっての安全保障上のかなめと考えられており、マニラの政治中枢も巻き込んで、防御の準備が進められた¹²⁾。

しかし、事態を重くみた当時の教皇レオ 13 世が二国間の仲介の労をとり、結果として、スペインによるカロリン諸島の領有が改めて承認されたのだった。そしてローマ教皇庁はカロリン諸島の宣教をスペイン・カプチン会に委託した。スペインにおけるカプチン会管区長であり海外領宣教地の総長でもあるホアキン・マリア・デ・リエバネラスは、スペイン政府に植民地カロリン諸島へ同会から宣教師を送ることを提案し、政府はそれを受諾した。そして、12 名のカプチン会士からなる先遣隊が、1886 年 4 月 1 日にオセアニアにむけて出発したのだった。12 名のうち 6 名が東カロリン諸島、6 名が西カロリン諸島を目指したのである¹³⁾。政治的には、1886 年 5 月 15 日の政令で、カロリン諸島はスペインの行政区分では西カロリン諸島と東カロリン諸島に分けられた¹⁴⁾。カプチン会はこの行政区分に従って、宣教師グループを 2 分割し、それぞれの

10) A. de VALENCINA: *Mi viaje...*, 1892, p.4.

11) José María SANZ GARCÍA: «Un geopolítico ante el conflicto de las Carolinas (1885)», *Anales de Fundación Joaquín Costa*, 4 (1987), p.143,

12) José María FERNÁNDEZ PALACIOS: «La crisis de las islas Carolinas de 1885 analizada desde Filipinas», *Ayer*, 134 (2024), pp.181-184,

13) 当時貴族であり外交官でもあったアルカラ・ガリアーノが、レオ 13 世の行った仲介に関する報告書を記している。以下を参照されよ。Emilio ALCALÁ GALIANO: *Meditación del Papa León XIII entre España y Alemania sobre las islas Carolinas y Palaos*, Madrid, Tipografía de los Huérfanos, 1888. (<https://archive.org/details/mediacindelpap00alca/page/20/mode/2up>)

14) Carlos PUENTE MARTÍN: «Del mar español al océano estadounidense, una transición geopolítica», *México y Cuenta del Pacífico*, 25 (2020), p.146. (DOI: 10.32870/mycp.v9i25.608)

地域に送り込もうとしたのであった¹⁵⁾。

なお、カプチン会士の到着時期と時間は多少前後するが、『フィリピン案内書 1892 年版』による現地の状況を挙げておこう。西カロリン諸島の居住者数は約 600 人、東カロリン諸島では 4500 人とされる。また施設として、東カロリン諸島に学校が 2 校、郵便局が 1 つあったことが記される一方、西カロリン諸島の施設に関する言及は見当たらない¹⁶⁾。

スペイン・カプチン会先遣隊のヤップ島での宣教活動について

先遣隊では、東カロリン諸島へむかった修道士のうちの 1 名が途中で死亡するなど不測の事態が続いた。他方、フィリピンのマニラに供給部が建てられたことを受け、現地のニーズに応えながら状況を把握し先遣隊を補強しようと、第 2 次グループがカロリン諸島へと向かうこととなった。バレンシーナはこの第 2 次グループの一員としてカロリン諸島へ渡ったのだった。

先遣隊のうち東カロリン諸島のグループは当面のあいだマニラに留まることとなった。しかし西カロリン諸島については、第 2 次グループを待つことなく先遣隊が宣教地の建設に向っていた。1886 年 7 月 29 日、6 名のカプチン会士はヤップ島に到着した¹⁷⁾。彼らより 1 か月ほど早く、西カロリン諸島の知事に任じられたマヌエル・デ・エリサ・ベルガラがヤップ島に到着しており¹⁸⁾、カプチン会士はさっそく、よき「スペイン臣民」として知事を訪問したという¹⁹⁾。

この折の蒸気船は、家財道具や食料を下ろすだけの時間だけ停泊して去っていく。そしてカプチン会士は計画に従いヤップ島に留まることとなった。知事は、彼らにテントや必要品をいれる箱を与えるなど、できる限りの便宜をはか

15) Bosa BASTIEN ANDE: «Volver. Retorno de los capuchinos españoles al norte de Colombia a finales del siglo XIX», *Historelo*, 14(2015), pp.153-154. (DOI: 10.15446/historelo.v7n14.46767)

16) Capitanía General de Filipinas: *Guía oficial de Filipinas 1892*, Manila, Tipo-Litografía de Chofre y Comp., 1892, pp.154-156.

17) A. de VALENCINA: *Mi viaje*..., 1892, p.39.

18) Francis X. HEZEL: *Historical Essays on the Catholic Church in the Caroline-Marshall Islands*, Chicago, Loyola University Press, 1991, p.1.

19) *Mi viaje*..., p.39.

った。宣教師らは、さっそくテントをたてて、臨時の住居を設けた。またのちには、定住するに足る住居及び教会堂を建てることとなる。地域の人々を束ねるル族の長と土地譲渡の契約を交わして土地を入手した²⁰⁾。宣教師らは自分たちで自分たちの建造物のために材料を集め、スペイン人の居住地域内での建築を始めた。足を泥の中に埋めて作業を行わねばならず、傷だらけになってミサを捧げることもできなくなる宣教師が出たこともあり、知事や軍部は彼らの作業を援助する兵士を毎日2名ずつ派遣した。また、宣教師らの身の回りの世話に関しては、アメリカ人の商業船船長の未亡人である現地人の女性が手伝いさんを遣わしてきた²¹⁾。

カプチン会士一行は、1886年9月27日、アッシジの聖フランシスコにキリストの聖痕が現れたことを記念する祝日を選んで新しい住居に移動した。まだ教会堂などの全体は完成してはいなかったものの、先遣隊のカプチン会士らは、この記念すべき祝日に引っ越しを行うことを重視したのであった²²⁾。

第二次グループがカロリン諸島へむかった行程について

さて、1886年12月、パレンシーナが管区長の書記として参加した第2次グループが、カロリン諸島へとむかった。彼らは、先遣隊によって供給部が置かれたフィリピン・マニラまで、蒸気船「ミンダナオ島号」で旅をした。パレンシーナによれば、この船の大まかな航路は、バルセロナを出発して、チュニス、カルタゴ、マルタ、クレタなど地中海の諸都市に寄港したのち、スエズ運河を通過、紅海をぬけてアラビア海へむかい、アデン、インド南端のコモリン岬を通過し、マラッカ海峡を抜けてシンガポールへ向い、その後マニラへ到着するというものだった。

パレンシーナを含むカプチン会士らは、マニラから船を乗り換えてヤップ島

20) *Mi viaje...*, pp.39-40. 購入した地の広さは不明。100ペソの対価であり、族長がこの金額を土地の権利者に公平に分配するという形をとった。なお契約時には、知事とその書記、通訳、カプチン会上長が署名した。

21) *Mi viaje...*, p.40.

22) *Mi viaje...*, pp.41-42.

へむかう。彼らは、1887年2月4日、マニラからタバカレラ社²³⁾の戦時運搬船に乗り、スールー海を南下した。この折には激しい嵐を経験、遭難した漂流者が救助される模様を目撃する。3日後、ミンダナオ島サンボアンガに到着したのち、船は対岸のバシラン島イサベラへ寄港した。そして翌日ふたたびサンボアンガへ船が向い、ここでカプチン会士らはイエズス会士の招待を受けて一旦下船した。食事に招かれ、ミサ祈祷書を贈られた。その後、ミンダナオ島ポロックに到着、この町では小教区の教会でミサを司式することができた²⁴⁾。

カプチン会士一行をのせた船は、2月10日にはポロックを出港、船は悪天候によりパラオ諸島には立ち寄ることができないまま、2月18日ヤップ島に到着、上陸した。バレンシーナは、再会のめど無く別れた先遣隊の宣教師らと再びみまえ、肩を抱き合って存在を確かめあったと記している。その後昼食をとり、バレンシーナらは、はじめてヤップ島を探索した。そしてヤップ島滞在中、バレンシーナは、先遣隊の宣教師らから情報を得て、彼らの働きを記録することとなったのである²⁵⁾。

バレンシーナの描写にみられるヤップの生活習慣

バレンシーナの記述からは、彼の自然への崇敬が伺える。訪問者が深い森に一人で分け入ることは危険と理解しつつ、バレンシーナは他数名の修道士とともに、ある午後、森へ入り、大きな川を訪れた。一晚を森で過ごすのだが、神が与える美しい夜の静けさに圧倒され、説明できない、ことばにならない喜びに満たされたという²⁶⁾。

バレンシーナはヤップ島で目にした事柄を驚きのまなざしをもって次のよう

23) フィリピンのタバコの専売事業に携わった同社は、1782年に創設されて以来、フィリピン群島にとって主要な収入をうみだした。ヌエバ・エスパニーヤ（メキシコ）から送られる植民地運営費にかわって、スペイン帝国支配下のフィリピンの財政を支えた。コミン・コミン, F., マーティン・アセニャ, P. 『タバカレラ：スペインたばこ専売史 1636-1998』東京：山愛書院, 2005年, 31頁。

24) 「自分たちが知り合った教区司祭はミンダナオ島の全ての、ほとんど全ての教区司祭と同様に、イエズス会に所属している」との記述がみられる。Mi viaje..., pp.29-30.

25) Mi viaje..., pp.30-32.

26) Mi viaje..., p.59.

に描写する。玄武岩からできた島は、サンゴ礁で囲まれており、船が港にはいる狭い運河があるのみである。島の中央、北部の一部には低い山脈がある。島全体で小川は2つしかないが、水が絶えることはない。島の中央部は無人で道もないが、海岸線には道が続くと述べる。輸入された動物の他、イグアナのようなものもある。宣教師らがスペインから持ってきたとうもろこしなどの野菜を試しに植えてみたところ、うまく育っているという。オレンジ、かぼちゃ、すいかななども生育状態良好である。島にもとからあった植物として、灼熱のなかに育つ球根や、またパイナップル、バナナ、パパイヤなどを挙げるが、ヤップ島で一番豊かなものは、ヤシであると記している。その実であるココナツはカリリン人にとっての大きな資源であり、そのジュース、実、などは食用に、油は明りに、樹皮は編み物に、幹は掘っ立て小屋をつくるのに用いられる。ドイツ人・イギリス人などが「不幸な先住の人々」を容赦なく搾取するので、手斧やまさかりなどを、自己防衛のための武器として調達しているとも書いている²⁷⁾。

先住民についての言及もある。ヤップ島の住民はマラヤ族に属している。皆共通にすらりとしていて、髪はカールして黒い。額は広く、目は黒く大きい。整った鼻、頬骨がでていて、大きな口、厚い唇、顔は大きめである。足は日焼けしている。男性は髪を伸ばして後ろでしばってお団子をつくり、藁のながい飾り櫛をつかってとめる。女性は、頭髪を、髪を2つにわけ、三つ編みして後ろでまとめるスタイルである。バレンシーナにとって、彼ら彼女らが身に着けているものは「論外」のものであったようで、「この気の毒な人々の衣装は描写するべきものではない」とまで述べる。男性のものは、ベルトのようなもの、それにまえのほうで10センチほどの幅の帯が下がる。その帯は脚の間を通って、後ろでベルトにつなげられている。女性のものはもう少し品位があり、トウモロコシのひげのような糸でできているペチコートのようなものを身につけているという。また貝殻でできた腕輪、首飾り、ベルトそしてイヤリングをつける。そのため、耳には大きな穴があいているし、男性は入れ墨をいれており、女性は手のひらや首、額を黄色で塗りたくっている。性格としては、一般

27) *Mi viaje*..., pp.33-34.

的に皆親しみやすい人達で気前がよいと述べる²⁸⁾。

ヤップでは80余りの村があり、それぞれに族長がいる。族長は、自分が治める村の人々の生死を握る。族長は戦いの捕虜やその子孫からなる奴隷をつかっている。先住の人々はココナツの木や葦をつかって建てた掘っ立て小屋のようなものに住むが、その外観はまったくもって不揃いである。食べ物には質素であり、魚や球根を火で焼く、特にバナナの葉にくるんで焼く方法を取る、と記す²⁹⁾。

このような記述は、バレンシーナのカルチャーショックの表れでもある。彼は、先住の人々にみられるヨーロッパ人のあり方とは異なる事象を強調することで、宣教師が彼らにもたらすあらたなカトリック的生活様式・世界観との対照化を試みた。これは、宣教師の仕事を読み手が正しく評価できるようにとの気持ちの表れであったといえよう³⁰⁾。

先住の人々の宗教心に関する考察を行うバレンシーナ

またバレンシーナは、カロリン人の宗教心についての研究も行い、彼らはキリスト教の神を知らない、人類の創造や贖いについて何の考えもない人々だと規定する。バレンシーナからみれば、先住の人々はヤップ島周辺にしか世界はないと思っている。他方で、彼ら自身のほかに、自分たちの目にはみえない人々が高いところにいると信じているとする。また自分たちは、はじめは上層の地域に幸せに住んでいたのだが、ヤップ島を見つけてそこに降りて来たと考えていると述べてもいる。

バレンシーナは、カロリン人の宗教には、天国、幸福感、墮天、エデンからの追放を彷彿とさせる考えがあると理解する。しかしそれらは、「完全に野蛮な先住民の貧しい思考」に合わせられてしまっていると記す。他方でバレンシーナは、地上に生きる人々のなかでもよい人間には自然死が訪れ、悪い人間には暴力的な死がもたらされると信じる先住の人々の思考に、部分的に、最後の

28) *Mi viaje*..., p.34.

29) *Mi viaje*..., pp.34-35.

30) *Mi viaje*..., p.32.

審判に類似した考え方を見いだしている³¹⁾。

また彼は、「人類の原始的な伝統思考のうちの墮落したもの」ではあっても、カロリン人は魂の不滅を信じているとする。しかし犠牲・あがないという考え方は持っていないという点で、カトリックとは異なるという³²⁾。また、十戒のうち、第5戒については名誉のためには人を殺すことも辞さない野蛮さがあるので、カロリン人のあいだにはその戒め自体がないとする。くわえて第6、第9、第10戒について、先住の人々は自分たちとはまったく別の世界の話だと考えていると断ずるのである³³⁾。

カロリン人には、カトリック聖職者の独身制はもとより、一般の平信徒が結婚するうえでもつ純粋性など理解できないとする。カロリン人の夫婦関係では、妻は夫に従属し奉仕するモノとして扱われているとして、そのような女性蔑視の状況に宣教師が介入した例を挙げる。たとえば、ある女性は、夫が自分に満足しておらず近く自分が売られてしまうと予想して、森のなかに逃げ、宣教師らを頼ったという。ヤップ島では、男たちは自分の家では夜眠らず、父や夫から奪ったもしくは彼らによって売られた異部族の女性を「ハーレム」の一種ともいえる場所に留め置いて、夜はそこで過ごすのだ、とバレンシーナは言う。前述した女性は、逃亡後3日目に捕えられてこの「ハーレム」に連れていかれた。しかし、なんとかそこから逃げ出すことができ、宣教師らに自分の苦難を語り、そこで宣教師らは彼女を捕えた男たちを誘拐犯として叱り、知事に彼らを罰するよう訴えると脅して、この女性を自由の身にさせたのである。そして、その後、この気の毒な女性はキリスト者になったとバレンシーナは結んだ。

バレンシーナによれば、宣教師らがヤップ島に到着してからわずかな時間しかたっていないが、野蛮な習慣が軽減され、お互いが復讐をしあう状況は完全

31) *Mi viaje*..., p.36.

32) ここではカトリックと訳出するが、原文では大文字で記された“Religión”である。

33) *Mi viaje*..., p.37. カトリックの十戒において、ここで提示されているそれぞれの戒の内容は以下の通りである。殺してはならない（第5戒）・姦淫をしてはならない（第6戒）・隣人の妻を欲してはならない（第9戒）・隣人の財産を欲してはならない（第10戒）。

に消えたという。ある部族では奴隷が居なくなり、また洗礼を受ける者がでている。スペインの守護の聖母に祈りを捧げる人々もいる。宣教師らの大変な努力によって宣教活動は成果を挙げているのだ、と自分たちの実績を肯定的に評価する³⁴⁾。

先住民の受洗者が現れる

ヤップ島での初めての幼児洗礼は、1887年2月2日、聖母マリアの清めの祝日に行われた³⁵⁾。きっかけは、体調の悪い母親と生まれたばかりの男の子のもとを宣教師らが訪ねたことであり、男の子の両親が新改宗者であったことから、宣教師の説得を受け入れて赤ちゃんを受洗させるはこびとなった。

代父は知事の書記官が、代母は先にも述べた、マリアナ諸島でレコレトス修道会の神父に教育を受け商業船のアメリカ人船長と結婚した先住民の女性が務めた。赤ちゃんは、教皇レオ13世にちなんでレオという洗礼名を授かった。この儀式を見るために多くの人々が集まったのだが、宣教師らは機会を活かし、人類の創造、原罪、贖い主としてのキリスト、聖なる秘蹟、などについて彼らに話しかけたという³⁶⁾。

またたく間に洗礼の評判は拡がり、自分のところにも宣教師らに来てほしいと多くの先住民が言い始めた。宣教師らが移住することには無理があったので、先住民は結局、島の南側、グドールという場所に移住してきた。このような動向を目の当たりにし、第二次グループの宣教師らとともに、知事もヤップ島内を視察することとなった³⁷⁾。

34) *Mi viaje*..., p.38.

35) 日付からみて、バレンシーナらの第二次グループはこの洗礼式に出ることはなかったはずである。しかし記述では、まるで実際に見ることができたかのような臨場感をもって書かれている。

36) *Mi viaje*..., p.45. この折の説教について、先住の人々の具体的な反応に関する記述はみられない。

37) *Mi viaje*..., p.46.

第二次グループ、ボナベ島へ移動する

その後、バレンシーナの属する第二次グループは、1887年3月6日、ヤップ島をあとにして、東カロリン諸島のボナベ島へと向かった。太平洋へ乗りだし、小さな島々を見ながら進み、同月14日に現地に到着した。その折には、船はこの島の「最も選ばれた人々」によって取り囲まれていたという。彼らは、島に施設をもつアメリカ人、イギリス人、ドイツ人や、スペインのガリシア出身の人間、ポルトガル人、メキシコ人など様々な国籍の人々であった³⁸⁾。宣教師らは、先住の人々との邂逅を予想していたため、このような先住の人々以外との出会いが生じたことは嬉しい想定外であったようである。翌日には、宣教師らは現地の探索をはじめ、カロリン人と話したり、教会を建造するのにふさわしい場所をさがしたりといった作業を始めた³⁹⁾。

枝の主日である4月4日には仮の住居が完成し、船からでて寝泊りをし始めた。またチャペルで、この島で初めて聖週間が祝われた。ちょうどその頃、ボナベの知事であるボサディーリョ氏が先住民の族長を集めて、武器を放棄してスペインへの忠誠を誓うように勧めた。その対価として、彼らには村長としての役割を与えたうえで、記章を付与しようと言った。族長全員が提案を受け入れ、セレモニーが行われた。そうして、それぞれが福音書に宣誓し、スペインの国旗と村長としての杖を知事から渡され、スペイン万歳の声があがると、カロリン人もそれを真似した⁴⁰⁾。

引き続いてカプチン会管区長が2歳の男子に洗礼をさずけた。子供の洗礼名は、当時の教皇、スペイン国王、そして知事の名前からとって、「レオン・アルフォンソ・エ・イシドロ」となった。これが4月19日のことであり、以降5月末まで、アメリカ人、もしくはヨーロッパ人の子供たち15名の洗礼式が執り行われた⁴¹⁾。またポーランド人男性と先住民女性の結婚の儀も執り行われた⁴²⁾。

38) その中に先住民は含まれていない。

39) *Mi viaje*..., p.52.

40) *Mi viaje*..., p.53. 500丁以上の銃が押収されたという。

41) *Mi viaje*..., p.53.

42) *Mi viaje*..., p.54.

カロリン人、キティの族長は、鶏、果物、道具などの贈り物をもって、何度も宣教師らのもとを訪れた。自分たちのところにも、神父に来てほしい、そのため家もチャペルもつくったと述べたという⁴³⁾。パレンシーナは、こうしてカプチン会が先住の人々から求められる存在であることを読者に明示するのである。

プロテスタントの宣教にライバル意識をもつ

パレンシーナはプロテスタント牧師のなかにいた一人の執事の例を挙げる。彼はフィリピン系の先住民で、名声と富を得ようと生まれた土地をあとにし、中国にわたったが成功できなかったという。船員として船に乗り込んだが、リューマチになって働けなくなり下船した、それがポナペ島アセンションだったという。これが1850年代のことで、数年後、アメリカ合衆国から2名のプロテスタント宣教師がやってきたとき、英語を活かして彼らに奉仕したことから、宣教師は彼を執事とし、聖餐式を行い、聖書を説いたり教会学校で教えることを認めた、という⁴⁴⁾。

パレンシーナら第二次グループは、この人物が年齢からくる経験と思慮を通してカロリン人、そしてプロテスタント牧師から信頼を得ていることに気づき、彼こそが自分たちの宣教地で一番の弊害になりうると考えた。そしてフィリピン人・スペイン人の兵士が執事と懇意になっていくなかで、カトリックの宣教師らは執事を背教者と非難した。この非難をうけて、執事は自分の思考に疑念をいだき、宣教師らと話し合った。最後には自分が過っていたと認め、プロテスタントを去る決心をしたのであった⁴⁵⁾。

この執事、ナルシソ・デ・ロス・サントスは、自分がメソジストに27年間属していたことを告白した後に、カトリック以外に救いはないと考えようになったことを手紙にしたためた。遠征隊のリーダーであった管区長は彼の姿勢

43) *Mi viaje*..., p.54. パレンシーナは、これらのことから、宣教の準備が整っており、実りが見込めると考えた。

44) *Mi viaje*..., p.54.

45) *Mi viaje*..., p.55.

を真摯に受け止め、カトリックの教義を自ら教えるため、サントスを新改宗者として認めた⁴⁶⁾。

数世紀にわたって、多数のスペイン人がカロリン諸島の存在を記憶のかたに遠ざけてしまっているあいだに、ドイツやアメリカ合衆国の企業がこの地域との貿易ルートを開拓しようとしていた。それにともなって、メソジスト宣教師がやってきたが、バレンシーナはあくまでも第一義の目的は貿易であり、宣教は二義的な目的だったと理解する。プロテスタント宣教師が知事に提出した調査票によると、読み書きのできる先住民は大変少なく、土地の耕し方を知っている者や、その道具をもっている者はほぼいない、とされていた。その記録を参考にしつつ、バレンシーナは、カロリン諸島におけるプロテスタントの司牧は広まっているわけではないと記した⁴⁷⁾。

カプチン会の宣教師らは、当初よりの活動方針を継続した。宣教地の善のために宣教師それぞれが働くこと、特に不信心な先住民たちにカトリックの教義を教えることを目的として彼ら・彼女らがスペイン語を読めるように現地語の辞書を作成するという。これは5月のできごとであった。カトリックの宗教暦上、5月は聖母マリアに捧げる月であり、スペインで行われるのと同様の祝い方はできないまでも、できる範囲でチャペルを飾り付け、中央にマリア像を配置し、夜にはロサリオの祈りや聖歌を捧げるなどした⁴⁸⁾。

カロリン人たちが群衆となって行事に集まり、聖母像に目が釘付けになっている様子をみながら、先住民の素直さを前に、バレンシーナは、カトリック宣教のほうがプロテスタント宣教よりも優位に進んでいるという持論を展開するのであった⁴⁹⁾。

バレンシーナ、スペインへ帰還する

5月末日、戦艦マリア・モリーナが85日の航海ののち、ポナペ島アセンシ

46) *Mi viaje*..., p.55.

47) *Mi viaje*..., pp.56-57.

48) *Mi viaje*..., p.57.

49) *Mi viaje*..., p.58.

ョンに到着した。目的は、植民地の監視であり、またフィリピンへ向かう蒸気船マニラへのはしけの役割を果たすためでもあった。そうしてパレンシーナらは帰還の旅のための支度を急ぎ始めなければならなくなった。パレンシーナはこの地を離れる前に、宣教地が確固たるものとなった様子を見届けたことが慰めであると記している。しかし現実には彼らの出発の数日後、現地で反乱がおき、流血事件となったことを鑑みると、ボナベ島における宣教活動が実際には予断を許さないものであったことがわかる⁵⁰⁾。

1887年6月16日午前、パレンシーナらは、ヤップ島へむけてボナベ島を出立した。同月22日にはソロール島へ到着、翌日にはヤップ島へ到着した。そこであらためて、先遣隊の行った活動を称賛し、また、知事や将官たちのおかげで宣教が開花しつつあることを讃えた⁵¹⁾。ヤップ島では、カテキズムをうけ信仰をえた先住民カップルがカトリックのしきたりにのっとった結婚と洗礼を望んでおり、6月26日セレモニーがもたれた。知事と島の医師の妻をそれぞれの代父・代母として、また新郎は黒、新婦は白の新しい服を着た形で、洗礼式と結婚式が執り行われた⁵²⁾。

パレンシーナは、新しい信者との別れを惜しみながら、またなぜ帰ってしまうのだ、島に残ってほしいという彼ら・彼女らの呼びかけの誘惑に負けそうになりながらも、6月27日、マニラへむけて出発した。海路を進み、7月7日にマニラへ到着、そこでは以前別れた宣教師らが迎えにでてくれた⁵³⁾。

7月25日、フィリピンのレガスピから海路、スペインへの帰途についた。シンガポールで船を乗り換え、8月1日に出港した。赤道へむけて南下し、同

50) *Mi viaje*..., p.60. なお、初版には言及がないのだが、第4版では、この反乱の詳細を伝える記述に言及し、「宣教についての歴史をよく知りたい人は、スペインがオセアニアの植民地を喪失するまでの島嶼部での宣教活動にあたった宣教師セヒスムンド・デル・レアル・デ・ガンディアが記述したものにあたる」ことを推奨する。A. de VALENCINA: *Mi viaje a Oceanía: Historia de la fundación de las misiones capuchinas en las islas Carolinas y Palaos*, (4ed.) Sevilla, Imp. de la Divina Pastora, 1902, p.128.

51) *Mi viaje*..., p.60.

52) *Mi viaje*..., pp.61-62.

53) *Mi viaje*..., pp.62-63.

54) *Mi viaje*..., p.63.

月 20 日にはスエズ運河に至る。その後は地中海をとおってマルタ島などをあ
とにし、最終的にバルセロナに到着して、パレンシーナの旅程は終了した⁵⁴⁾。

おわりに

カプチン会のカロリン諸島における一連の活動は、ローマ教皇庁はもとより、
地域の領有権を強化したいスペイン政府によっても支持されたものであった。
この宣教事業がスペイン帝国末期の「膨張」政策と密接にかかわっていたこと
は、カロリン諸島ヤップの知事が宣教師に対して援助を惜しまなかったことか
らも理解できる。他方で、スペインを出国してから 1 年経たずして帰国してい
ることから考えると、パレンシーナの任務自体は、長期間にわたる宣教活動を
展開する事ではなく、書記として管区長の視察に随行し、視察する宣教地の状
況を記録に残すことにあったといえよう。しかし、先住の人々に関する民俗学
的な記録も、情報源が明示されていない「語り」であるため、本書執筆をまえ
にした彼の意志であったはずの「忠実な記述」が実践されたかどうか、疑念が
残る。

帝国ドイツと領有権を争う島嶼部へ派遣されたパレンシーナは、宣教のため
の戦いに自分なりに挑むなか、スペインへの愛国心を呼び起こされる経験をし
た。彼が抱いた、スペイン帝国の一部としてカロリン諸島をスペインに再包摂
することが正当であると感じる一種の情念のようなものは、彼の記した書籍
『我がオセアニアへの旅…』が版を重ねていく様子からも、当時のスペインの
人々の間に広く共有されていた感覚なのであろうと考えられる。

しかし、米西戦争での敗戦の結果として、スペインはこの地域を手放すこと
となる。ドイツの領有地となって以降は、スペイン人カプチン会士の宣教事業
は、ドイツ人のカプチン会士に引き継がれ⁵⁵⁾、スペイン系の宣教師が再びこ
の地域へ出向くのは、日本が南洋群島の委任統治を担当することとなった折の
スペイン人イエズス会士の到来を待たねばならない。

55) B. BASTIEN ANDE: «Volver...», p.154.

Resumen

Impresiones de Fray Ambrosio de Valencina OFM sobre las misiones de los capuchinos españoles en Micronesia antes de la Guerra hispano-estadounidense de 1898

Fray Ambrosio de Valencina OFM viajó a Oceanía y dejó escritas sus impresiones sobre las misiones capuchinas, en los años ochenta del siglo XIX, en la Micronesia cuya soberanía estaba en disputa entre Alemania y España, y tras la mediación del Papa León XIII, quedó en manos de España hasta su pérdida en la guerra hispano-estadounidense de 1898. Este artículo analiza el contenido del libro de Valencina titulado *Mi viaje a Oceanía: Historia de la fundación de las misiones capuchinas en las islas Carolinas. Relación curiosa* y esclarece la mirada del religioso sobre la actividad misionera desarrollada en la zona, en la corta y última época bajo dominación de España.

本稿執筆にあたっては、JSPS 科研費 JP 24K15441 の助成を受けた。